

# 設立趣旨書

## 1 趣旨

ユネスコ世界自然遺産の屋久島は、九州最高峰の宮之浦岳を擁する山岳島です。標高に応じて移り変わるさまざまな環境に、多くの生き物が生息しています。ニホンザルの亜種、ヤクザルもそのひとつです。屋久島は、世界的に知られた霊長類の野外調査地で、長年の調査を通じて、興味深いさまざまな生態が明らかになりました。一方、サルは、人と自然の共存の難しさを示す生き物でもあります。農作物被害防除のため、年間 1000 頭ものサルが捕獲されています。ニホンザル研究の学術上の価値を踏まえて、農作物被害を科学的に管理するには、まず地元住民に、サルがどういう生き物か知ってもらうことが必要です。問題解決のためには、研究者以外にも、外に住む人々の力を借りることも有効でしょう。そのための人材育成も欠かせません。

わたしたち、ニホンザルの研究者は、1989 年以来、毎年夏に、ボランティアの調査員を募り、屋久島でサルの分布調査を行ってきました。この、自称「ヤクザル調査隊」に参加した人は、のべ 1500 人以上に上ります。大人数による調査は、期せずして、学生に野外調査の基礎を伝える、人材育成の場になりました。この調査隊から、大学教員、自然保護にかかわる行政や法人の職員、野生生物の調査にかかわる会社の社員など、自然に関する職業に就く多くの人材が育ちました。

わたしたちは、「ヤクザル調査隊」の活動を発展させ、法人として新たに出発したいと考えています。研究活動を、これからも推進すること。屋久島内外の人たちに研究成果を普及し、屋久島の自然の価値を広く知ってもらうこと。人と自然のよりよい関係を築くために、研究者と地元住民、屋久島に関心を持つ外部の人をつなぐこと。これらの活動の実現のためには、社会的信用力のある特定非営利活動法人格を取得することが必要です。われわれの調査隊の人材育成の側面を重視し、若い人たちに野生動植物を調査研究する訓練を積む機会や、これまで「ヤクザル調査隊」で築いてきた人脈を活かし、将来のキャリアパスを提供していきます。これらの活動は、世界自然遺産である屋久島の自然の価値を人々に伝え、それを後世に残すのにつながるだけでなく、そこから波及して、広く世界で活躍できる、野生動植物にかかわる人材の育成に貢献する、公益性の高いものだと考えます。

## 2 申請に至るまでの経過

「ヤクザル調査隊」は、当時龍谷大学の教員だった好廣眞一らニホンザルの研究者によって開始され、毎年夏に 40 名程度のボランティアの学生・社会人が参加して調査を行っています。現在では、ニホンザルだけではなく、総合的に屋久島の自然を研究しています。数十人という大きな規模で実施するには、安全管理等の問題から、代表者の個人的な調査とするのは問題があり、法人格を取得して、責任ある体制で実施するほうが望ましいという意見になりました。また、これまで十分ではなかった地元への貢献を強化し、研究上の「副産物」でしかなかった人材育成の側面を重視するには、法人化が必要という結論に至りました。

1989 年 8 月 第 1 回のヤクザル調査隊の調査を実施、屋久島全島でのニホンザルの分布の解明を目的に調査を行った。以降毎年 8 月に調査を実施

1998 年 8 月 第 10 回のヤクザル調査の調査を実施。この年以降、大川林道終点付近でのニホンザルの分布の変化についての長期継続調査を行う。

2006 年 8 月 第 18 回のヤクザル調査隊の調査を実施。この年以降、果実生産量についての調査を実施。

2008 年 8 月 第 20 回のヤクザル調査隊の調査を実施。この年以降、シカの個体数調査を実施。

2010年8月 第22回のヤクザル調査隊の調査を実施。この年以降、ヤマビルの調査を実施。  
2019年4月 東京でヤクザル調査隊30周年記念シンポジウム「1501人で解き明かした屋久島の  
ニホンザルの暮らし」を開催。  
2021年8月 第33回のヤクザル調査隊の調査を実施。

令和4年 4月27日

特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊  
設立代表者 好廣眞一